

2009 年度 小委員会活動成果報告

(2010 年 1 月 6 日作成)

小委員会名	地域文脈形成・計画史小委員会	主 査 名：木多 道宏 就任年月：20 09 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	都市計画委員会	委員長名：小林 英嗣 主 査 名：
設 置 期 間	2009 年 4 月 ～ 2013 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・都市計画、建築計画、農村計画、建築・都市史の分野から「新進気鋭」の研究者を委員に選定し、あるいは研究会に招き、「地域文脈」についての新たな研究体系の構築を行う。 ・都市や集落の歴史的事実を「再編集」する作業を通して、そこに継承されている空間性、社会性、計画の精神性、暮らし、記憶などの価値を読み解く。 ・積み上げられてきた価値の文脈を現代なりの方法で継承し、「進化」させていくためのデザイン論を展開する。 ・初年度は、「連続研究会」における議論と記録を基に、国内外における地域文脈の形成・継承の事例収集とそのしくみの解明、ならびにプランナーが果たした役割、生活文化の影響等に関する考察を行う。 ・2年度は、引き続き「連続研究会」を開催し、国内外における地域文脈の形成・継承、プランナーが果たした役割に関する考察を継続し、「公開研究会」により開港都市の地域文脈形成に関する比較研究を行う。 ・3年度は、主として1960年代における研究者・プランナーによる計画思想・理念の体系化と構造化、日本と海外との影響関係の解明、1年度・2年度成果の総括による「近代化」の意味解釈などを行う。また、1・2年度の成果を出版し、シンポジウムにより公表する。 ・4年度は、3WGの成果の統合による地域文脈継承デザインのモデル構築と成果公表を行う。 	
委員構成 (委員名(所属))	委員公募の有無：有り	
	主査：木多道宏（大阪大学） 幹事：中島直人（東京大学）、土田 寛（都市環境研究所） 委員：宇杉和夫（日本大学）、中野茂夫（京都工芸繊維大学）、 鵜飼 修（滋賀県立大学）、阿部大輔（東京大学）、青井哲人（明治大学）、 岡絵理子（関西大学）、岡部明子（千葉大学）、川島智生（京都大学）、 黒田泰介（関東学院大学）、篠沢健太（大阪芸術大学）、 高村雅彦（法政大学）、松山 恵（コロンビア大学） WGからの参画委員：加藤仁美（東海大学）、安田 孝（摂南大学） 清野 隆（立教大学）、田中 傑（芝浦工業大学）	
設置 WG (WG名：目的)	<ul style="list-style-type: none"> ・計画理念研究 WG（日本ならびに諸外国を対象に、文脈を読み込んだ地域のマネジメントの理念・思想的根拠を整理） ・地域形成史研究 WG（地域文脈の解明・事例収集と、「近代化」・「時代移行」の概念の考察） ・地域マネジメント研究 WG（日本ならびに諸外国の都市・地域を対象に、文脈を読み込んだ地域のマネジメントの方法を検証） 	
2009 年度予算	260,000 円	ホームページ公開の有無：無し 委員会 HP アドレス：無し

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回（年度内計画を含む。開催日をカッコ書きでお願いします）
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	

講習会	
催し物（シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等）	
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	<p>1. 2年間にわたる「連続研究会」のテーマ設定と人選を行った。テーマは次の7題であり、1題当たり、3～4名が話題提供を担当する。①社会主義・全体主義から解放された都市、②更新と文脈継承、③計画と形成、④都市の生態的組織、⑤計画と文脈継承、⑥継承の担い手・しくみ、⑦開港都市（公開研究会）。</p> <p>2. 第1回目の連続研究会を開催し、社会主義・全体主義体制下での都市計画・都市デザインが都市形成にもたらした問題と意義についての話題提供と議論を行った。中欧都市では、プラハ、ブダペストに限って言えば、都市の形態的な「コンテキスト」や「空間資源」に対する尊重の態度も見られる。</p> <p>3. 「コンテキスト」について、建築・都市デザイン思潮からみた考察を試みた。社会主義社会と資本主義社会における「コンテキスト」の理解の仕方、都市計画への表れ方の相違。欧州のティポロジアの、米国と日本における誤解。欧州と日本の現代における「地域文脈」への対応の在り方の相違などについて話題提供と議論を行い、2と3についてはテープ起こしを行い、3年度の出版へ向けた素材として蓄積した。</p>
委員会活動の問題点・課題	<p>1. 在地方委員の交通費の不足</p> <p>2. 各委員が蓄積している実績を基に深い議論を展開し、どのように新たな知見や論点に結びつけるか。</p> <p>3. 各委員があたためている「仮設」を提示しあい得た最新の知見を、どのようにして公表するか。</p>

*小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。